

まえがき



1970年、医学部4年生になった私は、朝日新聞の連載「ルポ・精神病棟」を興味深く読んだ。

しかし、そこに描かれた入院者の境遇は一部の悪徳精神病院のことだと思った。

翌年、医学部5年生になり、広島県内の国立療養所賀茂病院で教育実習を受けた。入院患者たちの顔は、うつむき加減で、歩行は小刻みだった。廊下を足を引きずりながらゾロゾロ歩く一団がいた。保護室の患者は床の片隅に座ってじっとしているが、よく見ると手や唇が震えていた。これが精神分裂病だと教わった。

しかし、今思うと、すべて薬の副作用による錐体外路症状（無意識の運動をつかさどる錐体外路系の障害によって引き起こされる症状）で、薬を大量に使ういわゆる“攻撃的薬物治療”を受けたための症状だった。大学の精神科教授も多剤処方をしていた。これが当時の標準的医療だった。私は実習に何の疑問も感じなかった。

1973年、出身大学の耳鼻咽喉科学教室に入局した。研修医の薄給では生活できないため、民間精神病院の土・日曜日の当直アルバイトを始めた。先輩医師から、患者が暴れたら使うようにと強い鎮静剤を数種類教えてもらった。当直室から看護師の電話情報通りに形だけの指示を出した。よほどの特別な事態でも起きない限り、患者を診ることもカルテを読むこともなかった。

10年間の勤務医を経て、1983年に東広島市で耳鼻咽喉科医院を開業した。その翌年、宇都宮病院の驚愕の入院者虐待・致死事件が起こったが、それは例外だと思った。

それから17年がたって、22歳の息子の寛之が統合失調症になって、俄然、精神病院が身近なものになった。

発病して10年たったころ、息子は医師と看護師に暴力をふるって保護室に入れられ、保護室内で首吊り自殺した。

私の目から、うろこが落ちた。

詳しいいきさつは、以下の通りだ。

現代書館